

文学テキストの空所を進化心理学で埋める

—ホーゾーンの『緋文字』を中心に—

藤沢 徹也

1. はじめに

読者はテキストの空所を埋めながら読み進めてく。テキストの空所は歴史的・文化的事実や「他者」などの概念で埋められることもあるが、学術的にその空所が埋まるかどうかは、論の説得力にかかっている。一方、テキストに足がかりが少なかったり、なかったりすると、推測するだけになり、説得力のあるものにはなりにくくなる。

文学が究極的には人間の本性に迫ろうとすることに疑いはないであろう。情報の少ない空所に対して、同じく人間の本性を追求する進化心理学を援用して埋めようとするのは、学際的な試みといえるのではないだろうか。今回扱う文学テキストは 1850 年にアメリカで出版された、ナサニエル・ホーゾーンの『緋文字』である。

チリングワースは妻の姦通相手であるディムズデルに精神的な復讐を行い、そのことにより悪魔へと変貌していく。ディムズデルは最後、罪の告白を民衆の面前でして、息絶える。復讐という目的を失ったチリングワースも程なくしてこの世を去るが、その前に、復讐相手であったディムズデルと自分の妻との姦通で生まれた娘であるパールに自らの莫大な財産を遺す。それによりパールは幸せに暮らしていると示唆されるが、語り手はそれ以上の情報を読者に与えてくれない。それゆえ、批評でもほとんど論じられることはないようだ。チリングワースのこの行為は、例えば、罪滅ぼしと一言で片付けるには不可解なところが多いように思われる。

チリングワースの財産贈与は、進化心理学の「包括的適応度」、つまり、自分と同じ遺伝子を持っている他の者の繁殖を助けることにより、自らの遺伝子を後世に残していくという行為が関係していたことを論じたい。

文学批評に関しては、文学研究者が進化心理学を文学研究に援用したのが 2000 年代前半のようだ。例えば、ジョセフ・キャロルが 2004 年に研究書を出している。日本では、2007 年に持留浩二が『ライ麦畑でつかまえて』について、進化心理学を援用して論じている。最近では、ジュディス・サンダースが 2018 年にアメリカ古典文学を分析した研究書を出している。しかし、進化心理学と文学を結びつけた研究は盛んではないように思える。

2. 進化心理学について

進化心理学は人間の本性を扱う新しいサイエンスである。本性と言うとき、厳密な定義がある。それは「進化によって形成された心理的メカニズムないしは心理的な適応の全体が人間の本性である」というものだ (Kanazawa & Miller 14)。人間の本性は進化によって形成された心理的メカニズムであり、そのような心理的適応を明らかにしていく学問である。適応とは生物の生存や繁殖の成功率を高めることを指す。そして、次の 2 つのように考える。①私たちの感情などは、気の遠くなるような長い年月の間に私たちの祖先が遭遇した出来事によって形作られていて、人間の本性は私たちの祖先の過去の体験の集積であり、それが現在の私たちの感情、行動に影響を与えている。②人間の本性は普遍的なものであり、私たちの考えや感情や行動などのかなりの部分が、すべての人間（あるいは、すべての男性かすべての女性）に共通する。このことは、様々な文化においても本質的には同じである (Kanazawa & Miller 1-2)。

この学問の主張を一言でまとめると、人の意思決定は進化上の目標にかなっていないということだ。不合理に思えたりする私たちの決定の多くは深い進化レベル、つまり、生き残って子孫を残すという観点に立つと、多くの場合賢明な決定であるといえる。さらに驚くことに、現代の私たちは祖先が暮らした狩猟採集時代の脳によって支配されている。なぜ、狩猟採集時代の脳なのだろうか。人類の歴史を振り返ってみたい。

私たちホモサピエンスは約 20 万年前に誕生する。私たちの直接の祖先はアフリカのサバンナで、安定した変化のない、自然淘汰の働く環境で、狩猟採集生活をしてきた。しかし、約 1 万年前に農耕が始まるのだが、1 万年という期間は進化から考えるとあまりに短い上に、この期間は進化が追いつけないほど環境が急速に変化したので、自然淘汰が起こらず、人間は 1 万年ほど前からほとんど進化していない。つまり、狩猟採集時代に最適化された脳で、私たちは現代生活を送っていることになる (Kanazawa & Miller 25-28)。ひとつ例を挙げると、満腹であっても、ケーキや唐揚げといった甘いものや脂っこい高カロリーのものを見ると、食べたくなったり、実際食べたりしないだろうか。そのために、現代ではカロリーをオーバー摂取し、肥満や病気の原因にも繋がっている。しかし、食べ物が豊富ではなかった狩猟採集時代の祖先にとって、高カロリーの食べ物に引きつけられること、また、食べられるときに食べることが、エネルギーを蓄え、生き残ることに役立った。その時代の判断を現代の私たちはいまだに続けていることになる。なぜ、高カロリーのもの、例えばケーキを食べたいと思ったのか尋ねたら、それがとてもおいしそうだったからなどの理由が挙げられると思われるが、実際は意識していないところで狩猟採集

時代の判断もしていることになる。前者を「至近要因」、後者を「究極要因」という。つまり、行動について解き明かそうとする場合、それがどのような仕組みで起きるのか（“How”の問い）に関する説明はその行動の「至近要因」と呼ばれ、一方、行動がなぜ起きるのか（“Why”の問い）に関する説明はその行動の「究極要因」と呼ばれる。後者、つまり「究極要因」は、どのような有利な機能があるからその行動が進化してきたかに関する説明となりうる（長谷川 et al. 67）。進化心理学では、この「究極要因」をより重要視する。

3. 財産をパールに遺したのは罪滅ぼしだったのか

チリングワースのパールへの財産贈与については以下のように語られる。

…… 読者に伝えておくべきことがある。老ロジャー・チリングワースはその死去（それはその 1 年のうちに起きた）にさいし、…… 遺言書によって、当地とイングランドにあった、かなりの財産をヘスター・ブリンの娘パールに遺贈したのである。(261)

チリングワースがなぜ、そのような決断をしたのかは語られないし、テキストにはその情報がない。罪滅ぼしであると言われることもあるが、復讐をした男の娘にそうしたとなると、それ以外考えられないからかもしれない。また、財産を遺贈したのは、「ヘスター・ブリンの娘」と語られているが、罪滅ぼしであれば、むしろ「ディムズデルの娘」と語られるべきではないだろうか。

チリングワースに、敵の子どもに対して、罪滅ぼしをするような性質はあったのだろうか。確かに、チリングワースは復讐へと向かう以前は人格者であった。しかし、ディムズデルへの復讐でチリングワースは悪魔へと変わっていく。チリングワース自身、かつては人間の心を持っていたけれども、今では悪鬼になってしまったと言っており、すでに人間の心を持っていないことを認めている。さらに、語り手からも悪魔になったと語られており、何より彼は人の心の聖域を侵犯し、神に逆らうという「許されざる罪」を犯してしまっている。このような状態で、かつての実直さを取り戻すとは考えにくいであろう。24 章「結び」では、語り手から地獄行きを宣告されている。

この地上で彼がなすべき悪魔の仕業がなくなったとき、この人でなしの人間の残された行くべき場所は、その「主人」が彼にたっぷり仕事をあてがってくれ、たんまり報酬も支払ってくれる地獄しかなかったのである。(260)

4. 財産をパールに遺した究極要因

チリングワースがさらし台に立っている女性は妻のヘスターだと認識した時、恐怖の戦慄が彼の顔をよぎる。これは、夫の方も妻と同じくらい不名誉なことだからだ。それゆえ、後に、自分の名誉を気にするチリングワースは、ヘスターに自分が夫であることを絶対口外しないように約束させる。サトシ・カナザワとアラン・S・ミラーによると、元来、男性は名誉に非常に重きを置く。それは、女性は地位の高い、評判のよい男を選ぶので、男性にとって地位と評判は繁殖成功率に直接影響するからだ。そのため男性は無意識に自分の名誉を守ることに固執し、時には極端な行動に走るということだ。遺伝子の理論からいえば、死より恐ろしいものがあり、それは繁殖に完全に失敗するである。名誉のためなら死を恐れない原因のひとつはこのためである (122-23)。

名誉を重んじていたチリングワースだが、死が目前となり繁殖に成功することが絶望的になる。名誉が繁殖に繋がらないとなると、名誉を捨てて他の行動に出てもおかしくないだろう。入子文子によると、「イングランドにある父祖伝来の広大な領地の相続は偽名では不可能で、由緒ある家名と身分を遺言書において明かすのは必定である」ということだ (213)。ディムズデルがパールに財産を遺したのは事実なので、チリングワースは、避けていた、自らがヘスターの夫であることを明らかにしたことになる。死を前にして、不名誉である恥を引き受けてまで自らの正体を明かすことは、利他行動といえるが、そのためにはそれなりの理由が必要で、単に罪滅ぼしといった軽いものではないと考えられる。たとえ罪滅ぼしだったとしても、敵の子どもに遺産を遺すより、教会に寄付をすることなどのほうが多くの人を助けることになり、効果的だと思われる。このことに関して、テキスト上には情報はなく、空所のままである。

そこで、究極要因を考えてみたい。パールに遺産を遺すことが、チリングワースの適応にかなっていると考えてはどうだろうか。死を前にした彼が考えたことは、生物として一番大切な子孫を残すことだが、自分の遺伝子を直接後世に残すことは難しいので、他の方法を実践したと思われる。ここで、「包括的適応度」という概念が関係する。まず、「適応度」とは、自分の遺伝子を次世代に受け継がせるために、いかに自分が生き残り生殖に成功

するかを指す。一方、血縁者はある一定の確率で（祖先が共通である）同じ遺伝子を共有しており、それも考慮に入れたものを「包括的適応度」という。つまり、血縁者のなかの自分と同じ遺伝子も考慮に入れて、それを増やしていくことを指す。チリングワースが名誉を捨てて、パールに財産を遺したことを考慮に入れると、彼は、パール、そして、ヘスターと何らかの血縁者である可能性が出てくる。また、ヘスターがチリングワースを毛嫌いだした訳も見えてきそうだ。チリングワースもヘスターも名家である。名家であるがゆえに、近親婚が続いた可能性がある。チリングワースは生まれつき体に変形しているが、これは近親婚が原因だとは考えられないだろうか。『緋文字』の次作である『七波風の屋敷』で、近親婚の鶏は退化し、貴族のようなヘブジバーという作中人物と似ているとも語られている。

ヘスターとチリングワースは年の差が開いているが、ヘスターは年齢差のことを問題視した発言はしていないし、年配の男性と若い女性の結婚は実社会でも小説でも珍しくはないであろう。チリングワースは結婚当初から老いさらばえた老人ではなかったようだ。ヘスターはチリングワースの人柄には敬意を抱いていたのに、愛情は全くなかったと断言している。そうなると、2人は何らかの血縁者にあたり、ヘスターが結婚にあたりそれを嫌がったことは十分考えられるであろう。

チリングワースに兄弟やいとこがいればそちらに財産を渡したほうが良いことになる。というのは、彼との共有遺伝子が多いからだ。そうできないのは、チリングワースの体の変形から察するに、彼の直系の一族は近親婚で滅亡に向かい、残っているのは彼1人になっているからではないだろうか。莫大な財産を所有していた理由も、ここにありそうだ。

なぜ、遺産を遺したのは妻のヘスターではなく、彼女の姦通相手の子供のパールなのだろうか。ヘスターが血縁者だとすると、彼と共有した遺伝子はパールより多いはずだ。チリングワースはその学識で、愛する人を失った後のヘスターは子どもを産まないと見て取ったのだと思う。実際、ヨーロッパから戻った彼女は、緋文字を再び胸につけ、緋文字の隠遁者となっている。一方、パールには無限の可能性がある。ヘスターより圧倒的に若く、繁栄していく可能性が高いからだ。チリングワースの遺産で、パールは当時の新世界で一番金持ちの女遺産相続人になった。再びニューイングランドに戻ったヘスターに、紋章の封印が押された手紙を送っていたり、ヘスターがアメリカでは着られない幼児服に刺繍をしていたりするの、名家に嫁ぎ子どもにも恵まれているようだ。チリングワースの遺伝子は生き延びたことになる。

5. まとめ

チリングワースがいわゆる敵の子どもであるパールに莫大な財産を遺した理由について考察してきた。テキスト上にその情報はない上に、罪滅ぼしだったとしても、それだけで片付けられることではなく、テキストには空所として残っていた。そこで、「包括的適応度」という概念でその空所を埋めることを試みた。チリングワースとヘスターは血縁者でパールにもチリングワースと共通の遺伝子が僅かであったとしても残っていたと考え、その遺伝子を増やし、後世に残していくために、パールに財産を遺したのではないだろうか。

確かに、これは推測の域を出ないが、人間の本性を扱う進化心理学を援用したことにより、テキストの空所は学際的知見で埋まったといえるのではないだろうか。

引用文献

Carroll, Joseph. *Literary Darwinism: Evolution, Human Nature and Literature*. Routledge, 2004.

Hawthorne, Nathaniel. *The House of the Seven Gables*. vol. 2 of *CE*, 1972.

---. *The Scarlet Letter*. vol. 1 of *CE*, 1962. (『完訳 緋文字』 八木敏雄 訳、岩波文庫、1992年)

※本文の訳は、八木敏雄訳を使用させていただいた。

Kanazawa, Satoshi, and Alan S. Miller. *Why Beautiful People Have More Daughters*. A Perigee Book, 2007.

(『進化心理学から考えるホモサピエンス』 伊藤和子 訳、パンローリング、2019年。)

Sanders, Judith P. *American Classics: Evolutionary Perspectives*. Academic Studies P, 2018. (『アメリカン・クラシックス - 進化論的視座から読むアメリカの古典 - 』 小沢茂 訳、風媒社、2024。)

入子文子 『ホーソン・《緋文字》・タペストリー』 南雲堂、2004年。

長谷川寿一 他 『進化と人間文化』 第2版、東京大学出版、2022年。

持留浩二 『「ライ麦畑でつかまえて」における親子間対立—進化論批評的解釈—』 『英文学論集』 第14号、佛教大学英文学会、2007年、12-28頁。